



木は、最初どうやってできたの

動物も植物も、最初は同じ

地球上に、バクテリアのような生き物らしいものが現れたのは、今から35億年前ごろといわれています。この生き物が、少しずつ環境の変化にあわせ、複雑で、より進んだ体のつくりや、生き方を取り入れて、進化してきました。動物と植物のいちばん大きい違いは、動物は自分で栄養を作ることができないけれど、植物は自分で栄養を作れる点です。植物は、緑色の葉緑素が、日光の助けをかりて、水と二酸化炭素から、糖分やでんぷんを作る（これを光合成という）ことができるのです。

植物の誕生

海で生まれたバクテリアの中に、今の植物と同じように、光合成を行うものが現れてきました。それが少しずつ進化し、今あるワカメやコンブのような海そうが現れ、やがて、地上で生活する植物も出てきました。それは、コケやシダやツクシのような、胞子でふえる仲間でした。

地球が少しずつ乾燥してきて、空気の成分も変化し、それまで栄えていた、巨大なシダの仲間がほろびていきました。環境にあった植物として次に現れたのが、イチヨウやソテツなどの、木の仲間です。この仲間から、お花や、め花ができるようになり、お花の花粉が、め花について、種ができるようになりました。やがて、今あるような、色とりどりの花が咲き、虫に花粉を運んでもらう木が、たくさん生まれてきました。

今生き残っている、いちばん古い木の種類は、中国産のイチヨウの木で、地球上に現れたのは、およそ1億6千年前といわれています。（監修・矢野 亮）

